

## 巻頭言 「産業理工学・学部改革基本構想の策定」

産業理工学部は、1966年に飯塚市で誕生してから2016年に50周年を迎えました。この数年間は、これまでの50年間を総括するとともに、これからの年月にどのように発展していくのかを考える重要な時期になっていきます。誕生とともに建てられた建物や施設が更新時期となっていることも重なり、ハード、ソフト両面でそれを考えないといけません。今回、そのソフト面の具体を示す重要な役割を持つものとして「産業理工学部・学部改革基本構想」を定めました。この構想は、2018年9月20日に開催された産業理工学部教授会にて承認を受けたところです。

前段となる「産業理工学部ミッション2014」(かやのもり20号、49-55ページ)から考えると、作成に足掛け6年を要しました。「産業理工学部ミッション2014」は、研究・教育・地域貢献の三つの柱で本学部が行うべき事項の方向性を示したものです。今回の基本構想は、それを基本として、(1)少し背伸びした学部と学科・部門の目標を設定し、(2)その実現方法を示すとともに、(3)構想の実行を確かめるプロセスを検討しました。

そのため、学部改革基本構想検討委員会と同ワーキンググループによって全体としての検討を行うだけでなく、各学科・部門にも個別の内容を検討するようにお願いし、学科長・WGMエンバールと学部長・学部長補佐との間で何回も協議も行いました。さらに、外部の方の意見を聞く機会を作り、高校や予備校のアンケートも行って内容を積み上げていきました。そのようにしてできたのが、「産業理工学部・学部改革基本構想」なのです。

(1)の目標設定に関して、この基本構想で示した本学部の理念は「地域イノベーションを進め、フロンティア人材を輩出する大学」ということです。これを実現するために、教育、研究、地域貢献の三つの分野で方向性を示すとともに、ポジショニングとして「九州一、近大一のユニークな教育と研究」を行うことを掲げています。最後の「九州一、近大一」というのが目標として非常に重要なキーワードになります。何も偏差値だけでそうなるうというのではありません。本学部でしかできないことを見つけて磨き上げ、九州唯一、近大唯一の学部を目指そうというものです。具体的には、「キラーコンテンツ」として各学科・部門に検討をお願いしました。

(2)の実行方法は、それに密接に結びついています。各学科・部門が設定したキラーコンテンツを実現する、あるいは実行するための具体的な手段の検討も行いました。キラーコンテンツの内容は、当然、学科・部門で異なりますから、実行手段の内容も異なったものになります。各学科・部門がそれぞれ強烈な個性を出すことで、本学部は全体としての個性も出せると思います。学部長(井原先生)は、本学部の特徴を「小さな総合大学」と称しました。どれだけそれぞれの魅力を出せるかが、本学部の将来を左右します。

(3)の構想の実行を確かめるプロセスとして、毎年行っている学部・学科のPDCAを使うこととしました。これは、学部の自己点検・評価委員会活動として行っているもので、ここで行っているPDCAで使えるように、学科・部門のキラーコンテンツと実行手段をPDCAチェック表としてまとめました。これは、各学科・部門で定めたキラーコンテンツの実行状態を各学科・部門が自らチェックするということです。さらに、近畿大学で作成している各年度の自己点検・評価表の中にも位置付けることを提言しています。これらによって、作りつばなしではなく、毎年度初めに計画し、年度末にチェックするという体制ができあがります。実行しなければ、どんないい計画でも意味がありません。

産業理工学部が今後発展するためには、教職員が丸となって学部づくりを行っていくことが必要です。当面、この基本構想がその旗印になり、学部づくりの方向性を示すものになるはずですが、みんなで力を合わせて、これからの産業理工学部を作っていきます。

近畿大学産業理工学部

地域連携研究センター長 日高 健